

北の大地で歴史を築く 『ツール・ド・北海道』



(財)ツール・ド・北海道協会
競技部長

今福 守

はじめに

ツール・ド・北海道は1987年に北海道の優れた自然環境を生かし、サイクルスポーツを核とした活動を展開する事により、我が国、特に北海道における観光資源および産業の開発、文化の振興、生活向上、健康・体力の増進に貢献し、また、我が国におけるサイクルスポーツなどの普及・振興および自転車利用の普及・啓発に貢献することを目的に、(財)ツール・ド・北海道協会、(財)日本自転車競技連盟(旧(財)日本アマチュア自転車競技連盟)の主催により、第1回大会が道央圏で開催されました。大会も2009年で23回目、国際大会としても13回目を迎える歴史ある自転車競技大会となっています。

わが国、初のステージレースとして

1987年当時の自転車競技(全日本アマチュア選手権ロードレース、全日本実業団自転車競技選手権など)では短コースを往復、周回するロードレースやトラックレースはおこなわれていましたが、自転車競技の中で最も華やかで自転車競技者の夢であるステージレース(街から街へと移動しながらタイムを競う)は残念ながらおこなわれていませんでした。歴史あるツール・ド・フランスをお手本に、わが国、初のステージレース、ツール・ド・北海道が本道の広大な大自然の中で第1回大会(1987)が開催されました。初日の札幌市豊平川河川敷地でのタイムトライアルと札幌市をスタートしてニセコ、洞爺湖、石狩、江別市へと4日間におよぶステージレース(延べ走行距離482km)に国内19チーム、95名の参加でした。1991大会には国内チームに加えて、韓国、アイルランドの海外2チームが参加、1997大会ではUCI(国際自転車競技連合)公認の国際大会として



▲第1回(1987)大会
フィニッシュ地点



第18回(2004)大会▶
フィニッシュ地点

開催し、カナダ、ニュージーランド、アメリカ合衆国など海外5チームと国内14チームの参加があり、その後、参加チーム数、チーム名は変わっていますが、国際大会としてレベルの高い競技が行われています。また、ステージレースが一瞬にして、街を走り抜けてしまうのに対して、周回コースを選手が何回も走る事によって観衆が繰り返し楽しめるように設定されたクリテリウムを1989大会から取り入れています。2006大会では大会20回を記念して、札幌市大通公園周回のクリテリウムがおこなわれて多くの札幌市民が自転車レースを観戦、声援をおくっています。市民レースも第1回大会から開催され、第1回大会では札幌市豊平河川敷地で個人タイムトライアル1.0kmと洞爺湖一周のロードレース36kmが376名の参加でおこなわれています。2008大会では海外2名、道内外で976名と多くの市民レース参加者がロードレースを楽しみました。



第20回(2006)大会 札幌大通公園クリテリウム



第22回(2008)大会 市民レース

大会コースの立案は

大会コースの素案づくりを前年の10月上旬から(財)ツール・ド・北海道協会でおこないます。道南、道東、道北の4地域から大会コースの地域分けをおこない、道路図の図上で、各ステージのスタート、フィニッシュとなる市町村を想定し、運動公園など多人数、車輛の収容できる施設の有無、さらに選手、関係者が宿泊するための宿泊施設数も条件となります。コース選定条件としてはステージの走行距離、コースに設けるホットスポット(市街地で観客の多いところ)、山岳ポイント(上り勾配の続く山頂付近)の選定位置がポイントとなります。次に

現地コース確認ではステージごとの走行距離とスタート、フィニッシュ会場の設備、収容能力などを見ます。雪解けを待って、4月下旬には日本自転車競技連盟国際審判による現地コース確認がおこなわれ、競技コース(案)が決まります。その後、交通規制お願い看板設置図、競技の安全確保に必要なコース整理員配置図、スタート、フィニッシュ会場図などを作成して大会の準備を進めます。さらにホームページ、大会ポスター等でのPR活動も順次おこないます。

多くのみなさまに支えられて

国道や道道、市町村道を使用するロードレースでは道民のみなさまのご理解とご協力はもちろんですが、レースをスムーズに運営するために競技コースとなる道路に進入する車輛や歩行者などを手際よく整理し、選手、観客、通行車輛などの安全を確保するコース整理員の配置が必要となります。このコース整理員の業務を競技コース沿道の市町村や北海道歩くスキー協会など全面的な協力体制(ボランティア)で協力をしていただいております。2008大会ではロードレース総延長727kmで28市町村、1641名の協力がありました。また、交通管理者(警察)、道路管理者からも競技レースが安全に進行する事での協力も多く受けています。さらに北海道開発局OB各地区のみなさまにも各ステージのスタート、フィニッシュ会場の安全施設設置、競技選手・関係車輛の誘導などにボランティアで参加していただいております。こうした多くのみなさまの支えでツール・ド・北海道が運営されています。



第2回（1988）大会 コース整理員、警察官によるコース整理状況

ステージレースの見所は

ステージレースは1チーム5人でチームの成績と各個人の成績を競うレースです。各チームは団体優勝をねらうのはもちろんですが、チームエースに個人総合時間賞を獲得させようとさまざまな作戦でレースに挑んできます。さらに、日ごとに変わる総合成績や、チームのコンディションを眺めながら、新たな作戦を立て、翌日のステージに挑みます。選手個人を対象にした最高の賞である個人総合時間賞にはステージごとにチャンピオン・ジャージ着用の栄誉が与えられて、チャンピオン・ジャージを着ている選手は、その段階で優勝に最も近くに位置しています。そのため、他のチームのマークを受けて、ひとりの選手を相手に、複数のチームが集団で抑えこみにかかることも、こうなると、いくら実力のある選手といえども単独で逃げ切ることは困難で、こうしたライバルによる包囲網から抜けだし、チャンピオン・ジャージを守るためにはチームによる強力なサポートが不可欠です。レースの作戦では①エースに先行してエースの向かい風を軽減させる。②包囲

網を形成し、敵チームのスローダウンを狙う。③敵チームのスタミナ配分を乱すなど、各チームの駆け引きがくり繰り広げられます。個人総合時間賞のほかにも、個人総合ポイント賞、個人総合山岳賞の各賞にチャンピオン・ジャージが用意されています。この賞は各ステージに設けられているホットスポット、山岳ポイント、それぞれの通過順位得点の合計で争われて合計点の最も高い選手がチャンピオンです。チャンピオン・ジャージは前日までの成績トップの選手が着用し、最終日の表彰台でチャンピオン・ジャージを着用している選手こそが、真のチャンピオンとなります。2008大会の参加チームはオーストラリア、オランダ、中国など海外5チームと愛三工業、シマノ、ブリヂストン、梅丹本舗、NIPPOなど国内15チームでありました。各チームには北京五輪代表の宮崎崇史（梅丹）、フランスで行われたパリ・コレーズで総合優勝した清水都貴（梅丹）、2年前のツール・ド・北海道総合優勝した西谷泰治（愛三）、全日本選手権ロードレースで優勝した野寺秀憲（シマノ）ら日本のトップクラスの選手が参加して競技がおこなわれました。現在多くの日本チームが海外に挑戦しており、近い将来にはチームや選手が活躍するであろう、その登竜門とも言えるのがツール・ド・北海道のステージレースでもあります。今年のツール・ド・フランスではツール・ド・北海道でも活躍した新城幸也の活躍の様子がテレビなどで伝えられています。さいごに、今年もツール・ド・北海道2009が9月9日から～9月13日の5日間、道北、道央でレースが展開されます。北の大地を全力疾走するチーム、選手に、皆さまの応援をお願いいたします。（大会の詳細はツール・ド・北海道ホームページ<http://www.tour-de-hokkaido.or.jp>をご覧ください。）



チャンピオン・ジャージ

左から、緑：個人総合時間賞、青：個人総合ポイント賞、ピンク：個人総合山岳賞、黄：U23賞（新人賞・佐藤杯）